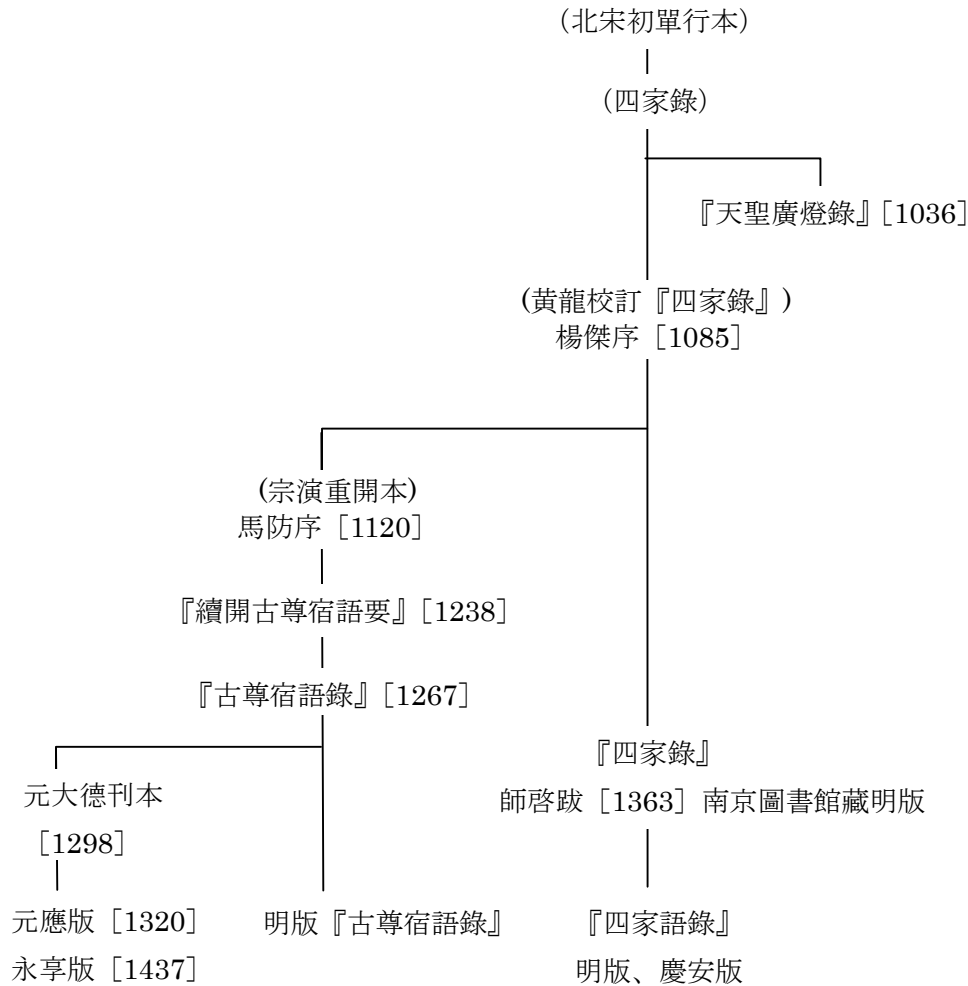


臨濟義玄禪師の禪思想

衣川賢次（日本花園大學）

一. 資料

臨濟義玄禪師の禪思想をかんがえるさいの資料をどこに求めるべきか？現在に傳わる『臨濟録』にはふたつの系統がある。ひとつは「四家録」の系統で、馬祖・百丈・黄檗・臨濟の四家の語録を一書に編纂した集成。『天聖廣燈録』（1036）に収録され、のち黄龍慧南の校訂を経て、楊傑の序（1085）を附し、明版『四家録』（師啓跋 [1363]）に受け継がれる。もうひとつは黄龍慧南校訂本をさらに圓覺宗演が再編し、馬防の序（1120）を附したテキストが『續開古尊宿語要』（1238）に収録され、さらに『古尊宿語録』（1267）に引き継がれ、この臨濟部分が元大徳二年（1298）刊本として単行化され、日本の五山版（元應二年版 [1320]、永享九年版 [1437]、大正藏所収）が刊行された。



つまり「四家録」系と「古尊宿」系のふたつの系統である。後者は圓覺宗演によって再編されたとき、編成にも字句にも改変が加えられ、宋代資料による増補があるから、前者のもっとも古い形態を存する『天聖廣燈録』をもって基本

資料となすべきである。

その「示衆」は『臨濟録』の主要部分を占めているが、この部分は唐代末期から五代（10世紀後半）、すなわち臨濟禪師圓寂（咸通7年、866）のほぼ100年後には成立していたと考えられる¹。「示衆」以外の部分（圓覺宗演再編本に分類された「上堂」、「勘辨」、「行録」に相当する部分）は成立が遅く、したがって後代の思想を混入している可能性を含むのに對して、「示衆」はもっとも信頼できる資料である。これをもとに「臨濟禪師の禪思想」を考察する²。

二. 臨濟の示衆

臨濟禪師の「示衆」は河北鎮州臨濟院において、各地から來參した行脚僧に向っておこなわれた説法の集録である。鎮州は當時五臺山進香道の東ルートの起點にあたり³、日本僧圓仁が記録しているように、一般の參詣者とともに行脚の禪僧が隊を成してこの道を通って五臺山へと巡禮し⁴、途中おそらく臨濟院を訪れたことがあったであろう。鎮州城外東南（のち城内に移転した）の臨濟院は小院であり、「示衆」と言われる説法は主にこうした行脚僧が対象であったから、しぜん求法行脚の問題にふれることが多くなっている。臨濟禪師の「示衆」は行脚僧に「真正の見解」（正しい考えかた）を持つことを要求し、「真正の見解」とはなんであるかをくりかえし説いている。「示衆」の冒頭第一段にその要點が盡くされている。

師示衆云：「今時學佛法者，且要求真正見解。若得真正見解，生死不染，去住自由；不要求殊勝，殊勝自至。道流！祇如自古先德，皆有出人底路。如山僧指示人處，祇是要你不受人惑，要用便用，更莫遲疑！如今學者不得，病在甚處？病在不自信處。你若自信不及，即便忙忙地徇一切境轉，被他萬境迴換，不得自由。你若能歇得念念馳求心，便與祖佛不別。你欲得識祖佛麼？祇你面前聽法底是。學人信不及，便向外馳求。設求得者，皆是文字名相，終不得他活祖意。莫錯！禪德。此時不遇，萬劫千生，輪迴三界，徇好惡境撥去驢牛肚裏生。道流！約山僧見處，與釋迦不別。每日多般用處，欠少什麼？六道神光，未曾間歇。若能如是見得，祇是一生無事人。」

師は大衆に向って言った、「いま佛法を學ぼうとする者は、とりあえず、正しい考えかたを求めなくてはならぬ。正しい考えかたを身につけたなら、輪迴にも陥らず、行くも留まるもみづから決める。解脱を求めなくとも、解脱はひとりでにわがものとなる。諸君！古來の先覺がたは、みなすぐれた方便をわきまえておられたものだが、わたしが忠告してやれるのはただ、きみたちは人に騙されるな、ということだけだ。忠告に従うなら、従うがよい。迷ったりしてはだめだ。いまの修行者の缺點は、どこに原因があるか？原因は自己を信じないところにある。きみたちが自己を信じきれないから、幻覺のままにあたふたと運ばれ、よろづの場面に振りまわされて、自由になれないのだ。きみたちが絶えず求めまわる、その心を終熄できたなら、そのときこそ達磨や佛陀と同じなのだ。きみたちは達磨がどんな人なのか、知りたいと思うか？今わたしの面前で説法を聴いているきみたちこそ、それなの

1 拙稿「臨濟録の形成（改稿）」、『臨濟禪師1150年遠諱記念《臨濟録》國際學會記念論文集』（禪文化研究所、2016）参照。

2 本稿は拙稿「感興のことば——唐末五代轉型期の禪宗における悟道論の探究——」（『東洋文化研究所紀要』第166冊、2014）、「禪學札記」（『花園大學文學部研究紀要』第48號、2016）の論述と一部重複するところがある。『臨濟録』の引用は拙稿譯注『臨濟録』（大藏出版、2017年刊行豫定）に據る。

3 嚴耕望『唐代交通圖考』第五卷河東河北區 篇四四「五臺山進香道」（中央研究院歷史語言研究所專卷之八十三、1989）。敦煌石窟第六一窟西壁には五代の壁画「五臺山圖」があり、その東端に鎮州城が描かれている（敦煌研究院編『敦煌石窟全集』第二六卷 交通圖卷、香港商務印書館、二〇〇〇）。

4 圓仁『入唐求法巡禮行記』卷2 開成5年（840）4月22日鎮州，同5月17日五臺山善住閣院（上海古籍出版社、1986）。

だ。きみたち自身が自己を信じきれないから、外に求めまわるのだ。外に求めて、たとい得られたとしても、みな文字や言葉ばかりで、けって活きた達磨の思想ではない。考え違いをしてはいかん！ 禪師がたよ！ 今 ^{こんじょう} 生に善知識に遇わなければ、永遠に三界を輪廻し、臨終に現れる好ましき境界、おぞましき境界のままに、驢馬や牛の腹に入って轉生することになる。諸君！わたしの見かたに據れば、諸君は釋迦と何の違いもないのだ。毎日の種々の行ないに、何の缺けたところがあるうか。きみたちの六根が放つくすしき光は、途切れることなく射しつづけているではないか。このように見ることができたなら、諸君はただ一生無事の人である。」

臨濟禪師は言う、「真正の見解」を持つことが解脱である。「真正の見解」とはなにか？今わが目の前で説法を聴いているきみたちこそが祖師・佛陀と変わらないということだ。それを信じるのができたなら、求めて行脚することのない無事の人となるのだ、と。

三. 理論——馬祖の革新

臨濟禪師がかく言う理論的根據は馬祖禪の考えかたである。中唐の馬祖道一（709～788）は「即心是佛」、「性在作用」を説いた。「佛性はわが心にあり、それはわが行為に發揮される」という佛性論である。伝統的な佛教學では、佛性は人人具有ではあっても、煩惱の雲に覆われて發揮されぬゆえに、繁多な戒律に依る煩惱對治、膨大な經論の學修、長期にわたる修行、その果てに佛陀の悟りが設定されていた。これは幾世にもわたって輪廻轉生をくりかえし、その果てに最終解脱を得るというインド人の思想であるが、中國人の馬祖はこのような迂遠な考えかたには耐えられず、孔子の「道は人に遠からず」（『禮記』中庸篇）に據って、「佛は人に遠からず」、「道は衆生を離れず」であるべきだと考えたのである。

嘗曰：「佛不遠人，即心而證。法無所攝，觸境皆如。豈在多岐，以泥學者？故夸父、喫話，求之愈疎，而金剛醍醐，正在方寸。」（權德輿「洪州開元寺石門道一禪師塔銘并序」）⁵

かつてわたくしにつぎのように言われた、「佛は人と離れた存在なのではない。わが心においてこそ佛なることを悟るのだ。しかし心という法は坐禪 ^{かほ} を修して治めるものではない。対象に觸れたとき實相として現れるのだ。多くの修行法を設定して、修行者を煩わせる必要などないのである。ゆえに夸父 ^{かいこう} や喫話 ^{かいこう} は追い求めて、ますます遠ざかったのだ。だが金剛と醍醐は、まさしくわが心にあるのである」と。

若説如來權教三藏，河沙劫説不可盡，猶如鉤鎖亦不斷絶；若悟聖心，總無餘事。（『天聖廣燈錄』卷8 洪州馬祖道一大寂禪師章）

6

いま如來が假りの方便として説いた教えについて話すなら、永劫に話し續けても終わらない。まるで罪人の鎖の拘束が断ち切れぬようなものだ。しかし如來の心を悟るならば、一舉に決着がつく。

⁵ 『唐文粹』卷64，四部叢刊初編/『權德輿詩文集』卷28，426頁，上海古籍出版社，2008。案：攝，文集作者：話，文粹從口，文集從土，今據『莊子集釋』天地篇。

⁶ 開元寺版宋本『天聖廣燈錄』、『宋藏遺珍 寶林傳 傳燈玉英集』附録，402頁，禪學叢書，中文出版社，1975。

非離眞而有，立處即眞，立處盡是自家體。若不然者，更是何人！(『景德傳燈錄』卷 28 江西大寂道一禪師語)⁷

人は眞理を離れて存在するのではない。いまここにこそ眞理があるのだ。いまこのすべてが自己の本體である。もしそうでないなら、いったいわたし以外の誰にその資格があるというのだ！

後聞洪州大寂禪門之上首，特往瞻禮。業身逾六尺，屹若山立。顧必凝睇，聲忤洪鐘。大寂一見異之，笑而言曰：「巍巍佛堂，其中無佛。」業於是禮跪而言曰：「至如三乘文學，粗窮其旨。嘗聞禪門即心是佛，實未能了。」大寂曰：「只未了底心即是，別物更無。不了時即是迷，若了即是悟；迷即衆生，悟即是佛；道不離衆生，豈別更有佛！亦猶手作拳，拳全手也。」業言下豁然開悟，涕淚悲泣，向大寂曰：「本謂佛道長遠，勤苦曠劫，方始得成。今日始知，法身實相，本自具足，一切萬法，從心所生，但有名字，無有實者。」(『宋高僧傳』卷 11 唐汾州開元寺無業傳)⁸

のち洪州の馬祖禪師が禪門の指導者だと聞き、出向いて挨拶をした。無業は六尺の巨漢、馬祖の前に出ると、まるで山が屹立したようで、相手を見るときはギロリと凝視し、加えて梵鐘のごとき大音聲。馬祖は一見して大器だと知り、笑って言った、「たいそう立派な伽藍だが、本尊がお留守だな。無業はかしくまわって禮拜し、跪いて、「わたくし、佛教の學問はほぼ窮めました。禪門では(即心是佛)だと承りましたが、これがまったくわかりませぬ。すかさず、馬祖「わからぬという、その心こそがそれだ！それ以外にはない！わからない時が迷いだ、わかったら悟りなのだ。迷えば衆生、悟れば佛だ。道は衆生を離れてあるのではない。衆生のほかに佛があろうか！握れば拳、開けば掌じゃないか。」これを聴くや、無業は豁然大悟した。涙があふれるまま、申し上げた、「わたくし、佛道というものは長く遠い道のり、無限の苦しい修行の果てに、はじめて成道があるのだと思っておりました。今日をはじめで知りました。法身という眞實相はもともとわたくしに具わっていた、一切のものはわが心より生じ、それは名辭のみあって、實體はないのだ、と」。

馬祖の教説のうち「即心是佛」は廣く受け入れられたが、「性在作用」(作用即性)説はただちに南陽慧忠(?-775)の反撥を呼び⁹、圭峯宗密(780-841)の危懼を招き¹⁰、のちの宋學の批判もこの點に集中している¹¹。しかしこの點こそが馬祖の教説の新しさであり、「即心是佛」なることを人が感得する方法なのであった。禪の悟り「即心是佛」はいかにしてわがものとして實感されるのか。「性在作用」——見聞覺知の日常の營爲のなかに佛性は發揮されているというが、これはいかなる事態であるのか。馬祖は言う、

一切衆生，從無量劫來，不出法性三昧。長在法性三昧中，著衣喫飯，言談祇對。六根運用，一切施爲，盡是法性。不解返源，隨名逐相，迷情妄起，造種種業。若能一念返照，全體聖心。汝等諸人，各達自心，莫記吾語。(『天聖廣燈錄』卷 8)¹²

すべてのひとびとは、久遠の昔より今に至るまで、法性三昧(ひらかれた悟りの世界)からはみ出たことはない。つねに法性三昧のただ中で服を着け、

⁷ 東禪寺版宋本『景德傳燈錄』、577 頁、禪文化研究所影印本、1995。

⁸ 『宋高僧傳』上册、247 頁、中華書局、中國佛教典籍選刊、1987。

⁹ 東禪寺版宋本『景德傳燈錄』卷 28、571 頁、南陽慧忠國師語：「若以見聞覺知是佛性者，淨名不應云法離見聞覺知。若行見聞覺知是則見聞覺知，非求法也。」

¹⁰ 石井修道「眞福寺文庫所藏の『裴休拾遺問』の翻刻」、「今洪州但言貪嗔戒定一種，是佛性作用者，闕於揀辨迷悟倒正之用也。」(『禪學研究』第 60 號、1981)。

¹¹ たとえば『朱子語類』卷 126「釋氏」第 52～63 條、中華書局、理學叢書、第 8 冊、3019～3024 頁。

¹² 開元寺版宋本『天聖廣燈錄』、402 頁。また『正法眼藏』卷上。

飯を喰らい、人と語り、應對しているのだ。六根のはたらき、あらゆる行爲のひとつひとつが法性に叶っている。しかるにこの根源に立ち返ることができないで、表面的な名前や形を追い求め、むやみに迷いを起こしては、さまざまな業を造る。しかしもし一瞬でも気づき返り見たなら、そのとたんにまると聖人の心である。諸君よ、わたしの言葉に従うのではなく、ひとりひとりがみづからの心に立ち至るのだ。

この「一切衆生、從無量劫來、不出法性三昧。長在法性三昧中、著衣喫飯、言談祇對」という説の背後にも、中國人らしい「百姓は日用して知らず」（『周易』繫辭傳上）という考え方があろうである。「すべての人が悟りのただ中に在る」とは、證明も説明もできない確信というほかないが、ただ「一念に返照」することによってのみ、このことわりが自己に實感されるという。すなわち「回光返照」という回心の體驗を要するのである。個人におけるこうした事理圓融した世界の實現を、馬祖が「皆な心の迴轉に由る」（『景德傳燈錄』卷28「江西大寂道一禪師示衆」）と言っているのは、かれじしんにその體驗があったことを示唆しているようであるが、「一念に返照」して「自心に達する」、その契機はなんであるか。それが馬祖の「見色即是見心」（物を見てわが心を知る）という悟道の方法である。

法無自性、三界唯心。經云：「森羅及萬像，一法之所印。」凡所見色，皆是見心。心不自心，因色故心；色不自色，因心故色。故經云：「見色即是見心。」（『宗鏡錄』卷1, T48. 418c）¹³

ものごとには不變の實體はない。世界内の存在はただ心のみ。ゆえに經に「あらゆる存在と現象は、心が現出したもの」という。ひとに見えるものは、みな心の現出として見えるのだ。心はそれ自體で心なのではなく、物に對してはじめて心なのであり、物はそれ自體で物なのではなく、心を待つてはじめて物なのであって、兩者は相依相對の關係にある。ゆえに經に「物が見えると心が見える」といわれる。

ここで馬祖は師の南嶽懷讓の語に據りつつ、「見色即是見心」をつけ加えているのであるが、この「見色即是見心」のもとは、つづく經典は未詳である。そしてこれは『楞伽經』の「自心現」、「自心現量」を馬祖が言い替えたものと理解されている。『楞伽經』にはつぎのように言う。

佛告大慧：「如是。凡夫惡見所噬，外道智慧，不知如夢，自心現量，依於一異、俱不俱、有無非有非無、常無常見。譬如畫像，不高不下，而彼凡愚，作高下想。」（『楞伽阿跋多羅寶經』卷2〈一切佛語心品〉，T16, 491a）

佛は大慧に告げた、「そのとおりだ。凡夫は誤った見かたに執られて、外道の淺はかな智慧のように、夢のようなことだと知らず、自分の心が現出したものを見て、さまざまの判斷をするのだ。例えば繪に描かれた像は平面で高低はないが、凡夫愚夫は見て高低があると思ひこむようなものだ。」

これは人がいかに認識を誤るかという説である。『楞伽經』の「自心現量説」は「自心が妄想によってありもしない幻想を現出して、さらにその幻想を實體視してさまざまな感情を抱く」というもので、それを譬喩（陽炎・乾闥婆城・夢・畫像・垂髮・火輪・水泡・樹影など）によって説明するのである。『楞伽經』の唯識説は、「ものを見るとか知るということは、認識論的にいえば、對象そのものを見、知るというよりは、對象についての像を心内に作り、それを見、知

¹³ この馬祖の説示は南嶽懷讓の説に依據している。「讓大師云：『〈一切萬法，皆從心生〉。若達心地，所作無礙。汝今此心，即是佛故。達磨西來，唯傳一心之法。〈三界唯心〉，〈森羅及萬像，一法之所印〉。凡所見色，皆是自心。心不自心，因色故心。……從心所生，即名為色。知色空故，生即不生。』」（『宗鏡錄』卷97, T48. 940a）

るのである。…すべての存在（われわれが客観的實在と思っているもの）は、實は心内に作られたイメージにすぎない。すなわち、心が現わし出した像であり、われわれはそれを見て、それに執われているのだ」（高崎直道）¹⁴と言われる。ただし「自心現量」という心の習性は『楞伽經』においては自明の理なのであって、証明の必要のない前提として繰り返し説かれるばかりである。

この心の習性としての「自心現量」はたしかに「見色即是見心」という定言の背景をなすものではあろうが、両者はじつは相反する立場から言われた言説なのである。外界は自心の現出だという唯識説とともに依據しながら、「自心現量」は人が外界を實體視して認識を誤る否定的な心の習性をいうのに対して、「見色即是見心」は逆に外界を見るわが心を再発見して、そこに佛心の作用を認めるのであって、肯定的にかくあるべしというテーゼとして提示されるのである。

馬祖によれば、人間はみな覺醒した世界に生きているのであるから、日常の生活の裡に自足しておればよいのであって、このうえ更に「佛法」を學び、「修行」をし、「坐禪」をして「悟り」を求める必要はまったくない、外にそれを求めることはむしろ清淨心を汚すものである、とした。馬祖はいう、「道は修むるを用いず。但だ汚染する莫れ」¹⁵。もし「修」をいうならば、「自性は本來具足せり。但だ善惡の事上に於いて滯らざるを、喚んで修道の人と作す」¹⁶。宗密も總括していう、「但だ心に任するを修と爲すなり」¹⁷。すなわち「馬祖は最終的にいかなる形式の開悟をも否定したのである。開悟ということは迷いと悟り、聰明と愚癡の區別を前提とする。だが平常・完全なる心がすでに佛性なのであり、がんらい區別する必要はない以上、開悟も存在せず、頓悟・漸悟など論外である」¹⁸。

この單純明快な「平常無事」論は僧俗に廣く衝撃を與えるとともに、また強い吸引力をもって多くの人を馬祖の禪門に引き寄せたのであるが、冷靜になってかんがえてみると、これほど「言うは易く、行うは難き」ことはない。ここにおいてあらためて「見色即是見心」という悟道論が注目されるにいたった。周知のように「性在作用」説の根據とされるのは、禪宗で傳承された菩提達磨の弟子波羅提尊者と異見王の問答および尊者の偈である。

王又問曰：「何者是佛？」波羅提曰：「見性是佛。」王曰：「師見性不？」波羅提曰：「我見佛性。」王曰：「性在何處？」波羅提曰：「性在作用。」王曰：「是何作用？今不覩見。」波羅提曰：「今現作用，王自不識。」王曰：「師既所見，云有作用，當於我處而有之不？」波羅提曰：「王若作用，現前總是；王若不用，體亦難見。」王曰：「若當用之，幾處出現？」師曰：「若出用時，當有其八。」卓立雲端，以偈告曰：「在胎曰身，處世名人；在眼曰見，在耳曰聞；在鼻辨氣，在口談論；在手執捉，在脚運奔。遍現俱該法界，收攝不出微塵。識者知是佛性，不識者喚作精魂。」（『宗鏡錄』卷 97, T48, 939,a）¹⁹

異見王はさらに問う、「何をもって佛とするのか」。波羅提、「本性を見るものが佛である」。王、「師は本性を見られたのか」。波羅提、「わたしは佛性を見た」。王、「本性はどこにあるか」。波羅提、「本性は作用するところにある」。王、「如何なる作用であるのか。いまそれが見えぬ」。波羅提、「いま現に作用しているのを、王は自分でわからぬのだ」。王、「師は見たものに作用があると言うなら、朕にもあるのであろうか」。波羅提、「王が作用するなら、現前するものはすべて本性であり、作用しなければ、本體は見えぬ」。王、「もし作用すれば、幾處に現れるのか」。波羅提、「作用すれば、八處に現れる

14 高崎直道『楞伽經』122頁，大藏出版，佛典講座，1980。

15 東禪寺版宋本『景德傳燈錄』卷 28 江西大寂道一禪師語。

16 開元寺版宋本『天聖廣燈錄』卷 8 馬祖章，402頁。

17 石井修道「眞福寺文庫所藏の『裴休拾遺問』の翻刻」。

18 賈晉華『古典禪研究』167頁，Oxford University Press，2010。

19 また『景德傳燈錄』卷 3 達磨章、『天聖廣燈錄』卷 6 達磨章、『正法眼藏』卷上等。

であろう。波羅提は雲間に立って偈で告げた、「母胎にあっては身といい、世に出ては人という。眼にあっては見るという、耳にあっては聞くという。鼻にあっては匂いを區別し、口にあっては語る。手にあってはものをつかみ、足にあっては走る。廣がっては世界を被い、收斂しては微塵に納まる。わかる者はこれが佛性だと知り、わからぬ者は精魂と呼ぶ」。

ただし、この故事の古い淵源は確認できず、おそらく馬祖禪を根拠づける『寶林傳』において登場したものらしく²⁰、中國人の創作にかかる可能性が高い。すなわち中國的な、中國人に受け入れられやすい理論である。

こうして、馬祖道一による「即心是佛」、「性在作用」（作用即性）、「平常無事」という佛性論と「見色即是見心」という悟道論をそなえた新しい中國禪が8世紀後半に登場した。この理論は馬祖の弟子、潯山靈祐（771～853）と黃檗希運（？～大中年間 [847～859]）らによって廣まり、9世紀江西・湖南を中心に多くの修行者を引きつけていた。臨濟禪師も若年の南方行脚でこの新しい禪思想に深く影響を受けていたのである。

四. 實踐——行脚僧への説法

河北鎮州臨濟院にあって、義玄禪師は馬祖禪の基本理論に據りつつ、各地から參問に来る行脚僧に「示衆」説法をした。その基調は「外に求めまわる行脚をやめよ」ということであった。上掲「示衆」に言うように「人惑を受けてはならぬ」と忠告したのである。

【一】「人惑」の第一は傳統的佛教學である

行脚僧はすでに既成の佛教に限界を感じて新興宗教たる禪宗に身を投じ、行脚に出たのであるが、臨濟によれば、かれらはこれまで馴染んできた佛教學の羈絆を脱しきれないで、いくつもの「誤った考え」に執われている。

(1) まづ第一に、佛陀を究極の理想と設定してその境涯に至らんことを求めることである。

【七一】 有一般秃比丘，向學人道：「佛是究竟，於三大阿僧祇劫修行果滿，始成道。」道流！你若道佛是究竟，緣什麼八十年後向拘尸羅城雙林樹間側臥死去？佛今何在？明知與我生死不別。你言：「三十二相、八十種好是佛。」轉輪聖王應是如來。明知是幻化。古人云：「如來舉身相，爲順世間情。恐人生斷見，權且立虛名。假言三十二，八十也空聲。有身非覺體，無相乃真形。」你道：「佛有六通，是不可思議。」一切諸天、神仙、阿修羅、大力鬼亦有神通，應是佛否？道流！莫錯！祇如阿修羅與天帝釋戰，戰敗，領八萬四千眷屬入藕絲孔中藏。莫是聖否？如山僧所舉，皆是業通、依通。

『佛陀こそは究極のかたである。三大阿僧祇劫の長きにわたって修行を積まれ、その成果として始めて成道されたもうたのだ』などと修行者に向って説教を垂れる坊主がおるが、諸君よ！もしきみたちまでがそのまねをして、『佛陀こそは究極のかたである』と言うなら、いったいどうして八十歳で拘尸羅城の雙林樹のもとで横たわって死んでしまったのか？佛陀は今どこにいるのか？われわれの生き死にと何ら変わらぬことがわかるであろう。きみたちは『三十二相、八十種好こそは佛のあかしだ』と言うが、それならあの轉輪聖王だって聖人ということになる。佛陀も現^{うつしみ}身の人だったとわかるであろう。古人が『如來の全身のすがたは、眼に見たいという世間の人情に随って表わしたにすぎぬ。疑り深い人は虚無の心をいだきやすいゆえ、間に合わせに名目を立てたのだ。でまかせに三十二と言っただけで、八十と言うのもでたらめである。かたちあるは覺者の身體ではない、かたちなきこそが眞のすがたである』

²⁰ 『寶林傳』卷7般若多羅章の逸文にこの部分の斷片が見える。椎名宏雄『『寶林傳』逸文の研究』、『駒澤大學佛教學部論集』第11號，1980。

と言うとおりである。きみたちは『佛陀はすばらしい六神通を發揮なさる』と言う。ならば、天の神、地の神、阿修羅、大力鬼もみな神通を發揮するのであるから、佛陀ということになるであろうか？諸君！間違えてはならぬ！阿修羅は帝釋天と戦って敗れるや、八萬四千の眷屬を率いて蓮の糸の中に隠れたというが、こんなのを聖人と言えるか？わたしがいま挙げたのは、みな業通、依通にすぎない。

「佛陀はわれわれと同じ血の通った人間であって、八十歳で死んだ人である」と、この時代に言った人はほかになく、「人間佛陀」はまったく新しい佛陀像であった。これはおそらく會昌の廢佛の徹底的破壊を目撃した臨濟禪師の感慨から生まれたものであろう。

(2) 第二に「佛陀の悟りの境涯に到達するには、多くの修行の階梯を履まねばならぬ」という教學の修道論である。

【四八】道流！取山僧見處，坐斷報化佛頭。十地滿心，猶如客作兒。等妙二覺，擔枷負鎖漢。羅漢、辟支，猶如廁穢。菩提、涅槃，如繫驢橛。何以如此？祇爲道流不達三祇劫空，所以有此障礙。若是真正道人，終不如是。但能隨緣消舊業，任運著衣裳，要行即行，要坐即坐，無一念心希求佛果。緣何如此？古人云：〈若欲作業求佛，佛是生死大兆。〉

諸君！わたしの見かたによるならば、わたしは報身佛、化身佛の頭も尻に敷く。十地に至った菩薩は小作奴隸、等覺・妙覺は囚われの罪人、羅漢・辟支佛は糞尿、菩提・涅槃は驢馬を繋ぐ杭にほかならぬ。なにゆえかく申すかといえば、それら修行の階梯が空名にすぎぬことに、諸君が遠観できない障害があるためなのだ。まことの正しき道人ならば、けっしてそうではない。ただ因縁のままに宿業を受けとめて生き、運に任せて身に合った衣裳をつけ、行こうと思えば行き、坐ろうと思えば坐り、ことさら悟りを得ようなどとはチラリとも思わぬ。なぜか？古人の言うとおり、「もしも修行して佛になりたいなどと思うならば、そのとき佛こそは生死輪廻の重大な契機となる」からなのだ。

佛教學が構想した巨大な修道體系がすべて激越な批判の對象となっている。臨濟がこれに對して「隨緣任運」という禪的＝老莊の生き方を對置しているのは、やはり中國人らしい主張である。

【六六】你諸方言道：「有修有證。」莫錯！設有修得者，皆是生死業。你言六度萬行齊修，我見皆是造業。求佛求法即是造地獄業，求菩提亦是造業，看經看教亦是造業。佛與祖師は無事人。

諸君らのところでは『修行して真理を悟る』と言っているが、考えちがいをしてはならぬ。たといそういう修行をしたところで、みな生死輪廻の業となるのみだ。諸君らは『六度万行のすべてを修せん』と言うが、わたしから見ればみな造業、佛を求め法を求めるのは地獄行きの業、悟りを求めるのも造業、經典を讀むのも造業である。佛陀と祖師がたは、外に何も求めず、爲すことのない無事の人であった。

【六八】道流！諸方說：「有道可修，有法可證。」你說證何法？修何道？你今用處欠少什麼物？修補何處？後生小阿師不會，便即信者般野狐精魅，許他說事，繫縛他人，言道：「理行相應，護惜三業，始得成佛。」如此說者，如春細雨。古人云：〈路逢修道人，第一莫向道。〉所以言：〈若人修道道不行，萬般邪境競頭生。智劍出來無一物，明頭未顯暗頭明。〉所以古人云：〈平常心是道。〉

諸君よ！きみたちのところでは『修すべき道があり、悟るべき法がある』と言っている。では訊くが、いったい何の法を悟り、何の道を修するのか？いまこうして活動しているきみたちに、いったい何が缺けているというのか？どこを修理して繕おうというのか？新米の坊主どもはこのことがわから

ず、ああいった狐ツキの輩が説法して人をしばりつけ、『教えられた教理どおりに自ら修行し、心口意の三業の清浄を大切に守って、始めて成仏できる』などと言うのに丸め込まれている。このように言う者は春の細雨のごとく絶えない。古人は言う、『道を修している人に出逢ったら、けっして話しかけてはならぬ』と。ゆえにまた、『もし道を修しようとするなら、道は歩けない。あらゆる邪鬼悪魔が現れて妨げるのだ。智慧の剣を一振りすれば、すべて消え失せ、光明が眞つ暗に、暗黒が明るい』と言われる。ゆえにまた古人は言う、『平常の心が道である』と。

臨濟は「修行して道（眞理）を悟るのではない」と言う。なぜなら「理想とする佛陀と祖師は求めることのない無事の人であったからだ。修行して佛陀になるのではない。今の諸君こそが佛陀と同じなのである。そのように信じて生きるのだ」と。

【五七】問：「如何是眞正見解？」師云：「你但一切入凡入聖，入染入淨，入諸佛國土，入彌勒樓閣，入毗盧遮那世界，處處皆見國土成住壞空。佛出于世，轉大法輪，即入涅槃，不見有去來相貌。求其生死，了不可得。便入無生法界，處處遊履國土，入華藏世界，盡見諸法空相，皆無實法。唯有聽法無依道人，是諸佛之母。所以佛從無依生。若悟無依，佛亦無得。若如是見得者，是眞正見解。」

問う、「正しい考えとはどういうことなのでしょう」。師の答え、「諸君がいつものように俗人の世界に入り、佛の世界に入り、汚れた世界に入り、清浄な世界に入り、さまざまな佛のおわす世界に入り、彌勒菩薩の住む高殿に入り、毘盧遮那佛の光明世界に入って探究しても、そこではさまざまな世界が成立し、持續し、壊滅し、空無となることを、諸君の心が現出しただけなのだ。たとえば、『佛陀はこの世に出生し、教えを説き、涅槃に入られた』と言うが、そこに佛陀その人が現われ、去って行った姿が、本当にあると思っはならぬ。そこに生きて死んだという實像を求めようとしても、つかむことはできぬ。たとい諸君が不生不死の眞實世界に入らんと、あちこち訪ねてさまざまな佛の世界を遍歴して、ついに蓮華藏世界に行きついたとしても、結局のところ（一切は空）であって、實體がないことがわかる。ただ、今ここにわが面前で説法を聴いている無依の道人だけが、諸佛を生み出す母なのである。ゆえに佛はその無依なところから生み出される。もし無依ということを悟ったならば、佛すらもまた外から手に入れるものはなくなる。かくのごとく見るのができたなら、これが正しい考えというものだ。」

ここで臨濟禪師は「眞正の見解」を行脚僧に即して述べている。諸方を行脚して老師からさまざまな教えを受けてその境涯を探究するが、それらはみな言語による觀念の世界に過ぎず、今わが目前に説法を傾聴している諸君らがその觀念を生み出しているのであり、觀念が空なるものと分かったとき、外に佛を求める行脚の必要はなくなる。それが「無依の道人」であり、それを自覺することが「眞正の見解」である、と。

【二】「人感」の第二は禪宗的教條である

馬祖禪の「性在作用」という佛性論は、佛性のありかを身體動作によって示す方法であり、眼を開閉したり、凝視したり、身體を振わせたり、指さしたり、手を振ったり、拂子を立てたりして見せる。また「見色即是見心」という悟道論は、そうして示された対象を見ることによって、「見るという作用」に自己の佛性を發見するというものである。この單純明快な手法は、その明快さによって當初、衝撃をもって迎えられるが、單純であるだけに、模倣者によって安易に亂用され、禪宗社會の大衆化によって庸俗的理解を生み、安易なワンパターンの方便と化した。臨濟はこうした方便を用いる老師や修行者を「老秃兵」、「野狐精魅」と大いに罵っている。

【四九】大徳！且要平常，莫作模様！有一般不識好惡禿兵，便即見神見鬼，指東劃西，好晴好雨。如是之流，盡須抵債，向閻老前吞熱鐵丸有日。好人家男女被者一般野狐精魅所著，便即捏怪。瞎屢生！索飯錢有日在！

禪師がたよ！まづは平常であれ！人まねをするでない！ものよしあしもわかまぬゴロツキ坊主どもは、狐ツキをやつて、あれこれと指さしたり、「よき晴れかな」、「よき雨かな」などとほざいておる。こいつらこそ借金を償うために、死んでから閻魔王の前に引き出され、焼けた鐵の玉を呑まされる日がくる。きみたちよいところのお坊ちゃん、お嬢ちゃんが、あんなキツネつきに騙されて奇怪なまねをするとは！ドメクラども！飯代を請求される日が来るぞ！

【七二】道流！眞佛無形，眞法無相。你祇麼幻化上頭作模作様。設求得者，皆是野狐精魅，並不是眞佛。是外道見解。

諸君！眞の佛はすがたを持たず、眞の法はかたぢがない。しかるにきみたちはひたすら現^{うつしみ}身の上にワンパターンのひとまねばかりして、それで佛や法を求め得たと思つても、そんなものはみな狐に化かされたに過ぎず、けつして眞の佛ではない。外道の考えかただ。

【七三】有一般不識好惡禿奴，即指東劃西，好晴好雨，好燈籠露柱。你看！眉毛有幾莖？「者箇具機緣！」學人不曾，便即心狂。如是之流，總是野狐精魅魍魎，被他好學人噏噏微笑言：「瞎老禿兵！惑亂他天下人！」

また、見識を缺くゴロツキ坊主は、あちこち指さして、「今日はいい天氣だ。」「いい雨だ。」とか「みごとな燈籠だ。」「立派な露柱だ。」とやる。見よ！眉毛が抜け落ちておるぞ！「これぞすぐれた接化だ！」などと、修行者はんでわからず、それに惑わされて舞上がる。こういった連中はみな狐ツキ、化け物だ。まっとうな修行者にはあざ笑われて、「ドメクラのゴロツキ坊主め！天下の人をかどわかしておつて！」とやられる。

【七五】如諸方學道流，未有不依物出來底，山僧向此間從頭打：手上出來手上打，口裏出來口裏打，眼裏出來眼裏打。未見有一箇獨脫出來底，皆是上他古人閑機境。山僧無一法與人，祇是治病解縛。你諸方道流！試不依物出來！我要共你商量。十年五載，並無一人，皆是依草附葉、竹木精靈、野狐精魅，向一切糞塊上亂咬。瞎漢！枉消他十方信施。道：「我是出家兒。」作如是見解。向你道：無佛無法，無修無證。祇與麼傍家擬求什麼物？瞎漢！頭上安頭！是你欠少箇什麼！

よそからここへやつて來る行脚僧は、どいつもこいつも何かに依存して出て來るやつばかりだ。わたしがここで片っ端から始末してやる。手振りて來るやつには手振りを始末する。口で來るやつには口を始末する。眼で來るやつには眼を始末する。そういうものから脱出して、わたしの前に出て來るやつは一人もおらぬ。みな古人の手管に惑わされておるのだ。わたしが諸君に与えるものは何もない。ただ諸君の病を癒し、自縛自縛を解いてやるだけだ。よそから行脚に來た諸君！何物にも依存しないで出て來てみよ！わたしはきみたちとともに問題を突き詰めたいと思つているが、五年十年このかた、相手になる者はひとりもおらぬ。みな草葉に依りついた亡霊やら竹木の妖怪やら狐の化け物やらであつて、他人の野蕪によつてたかつて喰らいついておるのだ。ドメクラども！多くの信者から施しを受けながら、報いることもできず、「わたくしは出家人ですから」などと言つて、當然だという料簡でいる。きみたちに言おう、他に求むべき佛もなければ法もない。修行をして得べき悟りなどないのだ。それなのに叢林を軒並みに訪ねまわつて、何を求めておるのだ？ドメクラども！自分の頭の上にもうひとつ頭をのつけるのか！きみたち自身にいったい何が缺けているというのか！

ここに「模様」と言つているのは、「如何んが是れ佛法の大意？」（佛とは何か？）、「如何んが是れ祖師西來の意？」

(禪とは何か?)と問われて、「自己である」ことを示すのに、馬祖禪の「性在作用」説の身體動作のパターンで應じるやりかたである。臨濟はこれを批判して「古人の閑機境に上る」とも言う。「指東劃西，好晴好雨，好燈籠露柱」も、外境を指し示して、物を見る自己の作用が佛性のはたらきなることに目覺めさせる接化の手段であり、當時は馬祖の弟子の滄山靈祐が用いた「見色即是見心」の具體的手段として廣く知られていたのである。

[三]「禪宗の見解」

以上の二種の「人惑」に對して、臨濟は「眞正の見解」、「禪宗の見解」という立場を打ち出している。

【五二】夫出家者，須辨得平常眞正見解，辨佛辨魔，辨眞辨僞，辨凡辨聖。若如是辨得，名眞出家。若魔佛不辨，正是出一家，入一家，喚作造業衆生，未得名爲眞出家。祇如今有一箇佛魔，同體不分，如水乳合，鵝王喫乳。如明眼道流，魔佛俱打。你若愛聖憎凡，生死海裏浮沈。

出家者というものは、平常で正しい考えかたをよく見分けねばならぬ。すなわち何が佛で何が魔であるのか、何が本物で何が僞物であるのか、何が俗で何が聖であるのか。ここのところをよく見分けることができこそ、本物の出家と言えるのだ。魔と佛さえも見分けられないなら、家を出たり入ったりするだけの、いわば地獄行き衆生であつて、本物の出家とは言えない。ただし、たとえば佛魔なるものがあつて、佛と魔が水と乳の溶け合つたごとくに一體不分であつたとしよう。鵝王ならば乳だけを飲む。しかし道眼を具えた禪僧ならば、魔も佛もともに打ちのめすのだ。(きみがもし聖を慕つて俗を憎むなら、煩惱の海に浮き沈みをくりかえすほかない)。

「眞の出家」は佛と魔、眞と僞、凡と聖を區別せねばならない。が「明眼の道流」すなわち禪僧はその區別の價值意識そのものを打破するのである。ここに教家と區別される禪家の特徴が表れている。

【五三】問：「如何是佛魔？」師云：你一念心疑處是佛魔。你若達得萬法無生，心如幻化，更無一塵一法，處處清淨，即無佛魔。佛與衆生是染淨二境。約山僧見處。無佛無衆生，無古無今。得者便得，不歷時節；無修無證，無得無失。一切時中，更無別法。(設有一法過此者，我說如夢如化。)山僧所說皆是。

問う、「佛魔とは何なのでしょうか？」師は答う、きみの不信の念が佛魔だ。きみがもし、あらゆるものは空、心も幻、何物も実体として存在せず、世界はカラリと清淨なのだとわかつたとき、佛魔はいない。佛と衆生は一方は清淨、他方は汚染の境涯とされているが、わたしの見かたでは、佛と衆生の區別はなく、古えも今もない。得ている者は始めから得ているのであつて、年月をかけて得たのではない。修行もいらねば、悟りもない。新たに何かを得たわけでも、失つたりもしない。わたしの見かたはいつでもこういうことだ。これ以外のものはない。「たといこれに勝る見かたがあるうと、そんなものは夢まぼろしに過ぎぬ。」わたしの言いたいことは、以上のとおりである。

【五五】道流！大丈夫兒！今日方知本來無事，祇爲你信不及，念念馳求，捨頭覓頭，自不能歇。如圓頓菩薩，入法界，現身向淨土中，厭凡忻聖。如此之流，取捨未忘，染淨心在。如禪宗見解，又且不然。直是見今，更無時節。山僧說處，皆是一期藥病相治，總無實法。若如是見得，是眞出家，日銷萬兩黃金。

諸君！大丈夫の漢よ！きみたちは今日にして始めて知つたのだ、本來無事であるにもかかわらず、ただそのことを信じきれぬために、絶えず外に求

めまわって、今の自己をないがしろにし、外に自己を捜す愚をやめられなかったことを。最高位の圓頓の菩薩すら、俗を嫌って聖を慕い、浄土の世界に生れかわろうと願っている。こういう連中は分別取捨の意識が拂拭できず、清浄と汚染の分別に執われた心がお残存しているのだ。わが禪宗の考えかたは、まったく異なる。無條件に現在だけを問題にして、無限の修行の果てに時節因縁が熟してから成佛するなどとは言わぬ。ただしわたしの説法は、ただ凡聖の執著に對する一時の對症療法なのであって、けっして固定して受け取るべきものではない。このように見ることができたなら、眞の出家者である。それこそひび（日に萬兩の黄金の供養さえ受けてよい）のだ。

圓頓菩薩は佛教教學では修行階梯の最高位に至った菩薩であるが、それでさえなお分別心に執われていると斷じ、「禪宗の見解」は聖意識（俗より修行の階梯を履んで聖位に至る）を拂拭するところにあることを宣言している。これが唐代禪宗の重要な特徴であり、臨濟禪師の思想の核心でもある。「外に凡聖を取らず、内に根本に住さず」（外なる聖〔佛〕を求めない、かといって内面〔心＝佛性〕に安住しない）、「心外に法無し、内も亦た得べからず」（心以外に法はない、しかしその心も實體はない）は臨濟禪師の思想的立場の表明として重要かつ有名である。人は聖なるものへのやみがたとりこい希求があるが、その持つ魅力は必然的に人を虜にし屈服させる魔力を持ち、元來そなえていた人を淨化させる力が却って人の自由を束縛するものへと轉化する。臨濟はこれを「佛魔」と呼んだのである。有名な上堂で臨濟自身が使った「一無位の眞人」もまさしくそれであった。

【一〇】上堂云：「赤肉團上有一無位真人，常從汝等諸人面門出入。未證據者看看！」時有僧出問：「如何は無位真人？」師下禪牀把住云：「道！道！」僧擬議，師拓開云：「無位真人是什麼乾屎橛！」便歸方丈。

上堂で言った、「さあ！諸君らの肉體にひとりの位階なき眞人がいて、諸君らの顔面からいつも出入りしているぞ！それを確かめておらぬ者は、とくと見よ！」すると、僧が前に出て問うた、「その位階なき眞人とは何でありますか？」師はすぐさま禪牀を降り來て、僧の首を捕まえて言った、「さあ言え！言え！」僧はなにやら言わんとした。師は突き放して、「位階なき眞人が何たる糞棒か！」と言って、方丈へ歸ってしまった。

〈一無位の眞人〉が顔面（「面門」）から出入りしているとはどういうことか？人間の見聞覺知の感覺作用を「顔面から〈六道の神光〉が光を放つ」（示衆）と譬喩表現をし、これを「無位の眞人が出入りしている」と擬人化したのである。「眞人」とは道家でもちいられた道の體得者（『莊子』大宗師篇）で、魏晉南北朝時代の漢譯佛典では阿羅漢（修行の最高位に達した人）をいうが、「無位」を冠しているから、もはやそれらとは異なって、地位・位階の價值枠に収まらないものの形象化である。しかもそれが生身の人間と一體であることは、古い傳承の『宗鏡錄』（卷 98）、『祖堂集』（卷 19）が「五蘊身田内に無位の眞人有りて堂堂と顯露し、毫髮許りの間隔も無し」（肉體の中からはっきりと〈無位の眞人〉が現れ出ている、しかもその〈無位の眞人〉は肉體とは毛一筋も差がない）と表現していることから明らかである。「赤肉團上に一無位の眞人有り」、「五蘊身田内に無位の眞人有り」などと、「赤肉團」、「五蘊身田」と「無位の眞人」を別のように言ってはいるが、「無位の眞人」とは生き生きと活動する生身の人間のことにほかならない。生身の人間のほかに超越的な實體を認めているのではないのである。しかし「赤肉團上有一無位真人，常從汝等諸人面門出入」という言葉には、容易に「超越的なものの存在」を想像させてしまいやすい。「眞人」の語は道教における道の體得者（仙人）でもある。果してこの上堂においても、「未だ證據せざる者は看よ看よ！」と言うと、さっそく僧が「如何なるかは是れ無位の眞人？」と問うた。臨濟禪師はただちに禪牀をおりて、僧を捕まえ、「道え、道え！」（このお前こそが〈無位の眞人〉なのだ。問うのでなく、みづから〈無位の眞人〉たるところを言えり。僧が何やらもぐもぐするや、臨濟は突き放して、

「(無位の真人) がなんたる糞棒か! 」と言い捨てて、方丈へ歸ってしまった。格調高く切り出された「無位の真人」の説法は、失敗に終わり、臨濟禪師は〈無位の真人〉の揚言を悔いつつ、不機嫌に方丈へ引きあげざるを得なかった。以後、かれは二度とこの語を使わなかったのも、このような誤解を恐れたためである。福建にいた雪峯義存(822~908)はこの話を傳聞して「林際は大いに白拈賊に似たり! 」と舌を巻いたという(『景德傳燈錄』卷一二。『祖堂集』卷一九では「林際は大いに好手に似たり!)。 「白拈賊」とは痕跡をのこさぬ大膽な白晝強盗をいう。それは「無位の真人」と言って、それが僧に誤解されるや、ただちに「乾屎橛」に轉化して僧を惡罵した、臨濟の電光石火の手腕を讚えた感歎の語である。同時代の雪峯も唐末の禪宗大衆化のなかにあつて馬祖禪の庸俗的理解をいかに克服するかという課題を抱えていたので、臨濟の「無位の真人」の上堂の問題点をただちに認識し、同時に臨濟に深い敬意を示したのである。この上堂はその結末と雪峯の評語全體からかながえなくてはならない。